



カラフル王国

haru

むかしむかし、カラフル王国という国がありました。

みんな、いろんな色が大好きで、同じ色が好きな人たちが集まって、赤の村、青の村、緑の村など、いろんな村に住んでいました。

そして、どの村の人たちも、絵をかくことが大好きでした。

青の村の人たちが、お絵かきで山を書きたいときは、緑の村で緑色をかりました。

緑の村の人たちが、お絵かきで赤い花を書きたいときは、赤の村で赤色をかりました。

そうやって、みんな仲良く暮らしていました。

そんなある日、いちばん人数の多い、赤の村の村長は考えました。

「赤の村の人数がいちばん多いのじゃから、カラフル王国でいちばんえらいのは赤の村じゃ。」

村長はさっそく村民たちに言いました。

「赤色がいちばんえらいのじゃ。太陽をかく時、みな赤色でかくではないか。太陽のように、われわれの力で、カラフル王国を支配しようではないか。」

村民たちは「そうだ！」と思いました。

それを聞いた黄の村の人たちは怒りだしました。

「太陽が赤色だって？太陽は黄色に決まっているじゃないか！人数は少なくとも、いちばんえらいのは黄の村に決まっている！」

赤の村と黄の村はケンカになりました。

赤の村の村民たちは、黄の村にせめこみ、手当たりしだいに赤色をぬっていきました。そして

言いました。

「赤くぬってあるところは、黄の村の村民は使ってはいかん！」

人数の少ない黄の村の人たちはどうすることもできず、おこって言いました。

「今後、赤の村には絶対に黄色をかさない！」

そのケンカのようすを聞いた他の色の村民たちは思いました。

「太陽がかがやく空は青色がないとかけない。だからわれわれ青の村がいちばんえらいに決まっている！」

「いや、その空に浮かぶ雲は白がないとかけないだろう！われわれ白の村だって、ないがしろにはできないのだ！」

こうして、村と村の間にはケンカが絶えなくなり、みんな仲が悪くなってしまいました。

そして、絵をかくときに、他の村から色をかりることもなくなったのでした。

そのケンカから20年後のある日、赤の村の小さな女の子、マーシャがお絵かきをしていました。お絵かきは、赤色だけでかくのが当たり前でした。

でも雨上がりのその日、空にあらわれたきれいな虹を見て、マーシャはそれをかこうとしましたが、赤色だけではどうしてもかけません。マーシャは泣き出しました。

「ママ、あのおそらのにじが、書きたいよう！」

マーシャのお母さんは、その時、ハッと思い出しました。子どものころ、いろんな村に色をかりに行って、楽しく虹をかいたことを。そして、泣いているマーシャを見て思いました。

「こんな世界はおかしいわ！」

マーシャのお母さんは、さっそく、ほかのお母さんたちに呼びかけました。

「楽しく虹の描けるカラフル王国をとりもどそう！」

ほかのお母さんたちも、立ち上りました。この呼びかけは、赤の村をとびこえて、他の村のお母さんたちにもとどきました。

お母さんたちはプラカードをかけて、必死で行進をしました。

「仲の良い王国をとりもどそう！」

「子どもたちが虹をかける王国をとりもどそう！」

この声は、各村の村長さんにとどきました。そして、村長さんたちの話し合いがもたれることになりました。

まわりではお母さんたちが見守っています。でも

「赤がいちばんえらいんじゃ！」

「なんだと、青色がないと、雨のひとつぶもかけないじゃないか！」

「それを言うなら、緑がなけりや、葉っぱの1枚もかけないぞ！」

話し合いは、どなり合いになってしまいました。

そばで、祈るような思いで話し合いを見守っていたマーシャのお母さんは言いました。

「色の違いばかり言っていても、何もまとまりません。どの色の村人にも共通のこと出し合おうじゃありませんか。」

「共通のこと？」

村長さんたちは、こまつてしましました。

すると、黒の村のタックという男の子のお母さんが言いました。

「まず、みんな、色が好きですわ！」

つづいて、紫の村のメリーという女の子のお母さんが言いました。

「そう、そして、みんな、絵をかくことが好きよ！」

お母さんたちは、つぎつぎと、みんなに共通なことを発表しました。

そして、最後にマーシャのお母さんが言いました。

「子どもたちが自由にお絵かきができる平和な世界をのぞんでいる、という気持ちは、どの色の村人もみんな同じですわ！」

それを聞いた村長さんたちは、何も言えなくなりました。

すると、赤の村の村長さんが口を開きました。

「わしがまちがっておった。人数が一番多いし、太陽の色だから、わしたちがいちばんえらいと思っておったが、そうじゃなかった。わしたちだけでは何もできぬ。今までぬった赤色は、もとにもどすから、どうか、他の村のみなに仲良くしてほしい。」

それを聞いたほかの村の村長さんたちも、次々と言いました。

「売り言葉に買い言葉だった。やっぱり、いろんな色で絵が書きたい。」

「そうだ、いろんな色が輝いてこそ、カラフル王国だ。」

村長さんたちも、まわりで聞いていたお母さんたちも、みんな笑顔になりました。

それから、カラフル王国のみんなは、元のように、いえ、元以上に仲良くなりました。

ケンカのときに投げ合った色がまざったとき、さらにしてきな色になることに気づいたからです。

おたがいの良さをみとめあい、さらに、おたがいを受け入れて、みんな、さらにしてきな絵がかけるようになったのです。